
さわ子「たんにん!」

國仙直香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さわ子「たんにん！」

【Nコード】

N3012Q

【作者名】

國仙直香

【あらすじ】

軽音楽部、アナザーストーリー。

3年生の担任の内示を受けたさわちゃん、こと山中さわ子先生。自身の高校時代の思い出、これまでの先生としての振り返りや軽音楽部での活動を通して、どう思い、何が変わったか。軽音楽部の活動を先生の目線から語りながら、担任を受けるまでの短いお話。

冬

校長「山中先生、ちょっと」

さわ子「はい。」

正直に言つて、私は未だに「山中先生」と先生に呼ばれるのが慣れない。校長は私がまだ高校生の頃には教頭だった。教頭先生には「山中ーっ!!」と怒鳴りつけられるのが当たり前だったから、「山中先生」と呼ばれるのに、やはり違和感がある。

さわ子「何でしょう、校長先生。」

校長「山中先生ね、来年3年生の担任をお願いしたいんだ。」

さわ子「えっ!?!」だって、私はまだ4年目ですし、副担任も今年初めて持ったんですよ。それを突然、進路の指導もある3年生の担任に……無理です。」

校長「そうは言っても……どうしてもお願いしたいんだ」

さわ子「少し……考えさせてください」

校長「わかった。期待しているよ。」

そろそろ担任を任されるかもしれない、という思いはあった。しかし、いきなり3年生の担任を任されるなんて……

普段は、お淑やかな優しい先生というイメージで通っているが、高校でメタルの魅力に取りつかれてから、それはそれは破天荒な人生を歩んできた。大学こそ、高校まで続けていたヴァイオリンの推薦で音大に進んだが、音大に進んでからは最低限のヴァイオリンの練習しかしてこなかった。同じ弦楽器でも、私はエレキギターばかりひき続けていた。メタルの道を極めるあまり、随分色々な無茶もした。正直に言つて、そんな破天荒だった私が、母校の音楽教師と

して赴任できるようになるとは、ハイテイでツモって国土無双よりも運のいいことだったろう。

母校に赴任して、さっそく音楽教師と吹奏楽部の顧問を務めることになった。1年目はとにかく周りにあわせ、慣れていくことに精一杯だった。その中で、努めて大人しく振舞おうとしていたので、知的に見える容姿も手伝って、次第に生徒や高校時代の私を知らない先生の間では、優しくお淑やかなイメージが作られつつあったのだ。

そんな何事もなく2年目を迎えられた私は、軽音楽部の廃部危機という問題に直面する。私が高校時代の経歴で最も際立って見えるのが軽音楽部の活動だ。1年生だったある日、友人に「軽い音楽だから」などと言われ、気楽に始めてみた軽音楽。実際、それは今までのオーケストラの重厚かつ格式張ったものとは全く異なった、自由な軽い音楽だった。当時好きだった先輩が好きだったというもののめり込むきっかけとなった。そして、軽音にのめり込む内に、ロックやポップス、メタルと言う違い、さらに友人も彼もメタルが好きだということを知っていった。そして、私も同様にメタルの虜となった。あまりにのめり込みすぎて、彼にはドン引かれたのも、今となってはいい思い出である。逆説的だが、メタルと出会ってなければ、今の私はなかったかもしれない。

そんな、メタルと出会うきっかけを与えてくれた母校の軽音楽部が廃部危機であるという。何とかしたかったが、2年目の私にはどうすることもできなかった。しかし、希望はあった。

律「えっ？廃部した？」

新1年生が軽音楽部に興味を持ってきて、私を訪ねてきてくれた。おそらく、私が昔軽音楽部に所属していたというのを、誰か古株の先生に聞いたのだろう。1年生のその目はまっすぐに、迷いの無い感じに、私の前に現れた。

しかし、私ができることはなんだろう、と考えてみても、軽音楽部の現状を明白に伝えることぐらいしかできなかった。

さわ子「正確には廃部寸前ね。去年度までいた部員はみんな卒業しちゃって」

さわ子「今月中に4人入部しないと廃部になっちゃうの」

律「だから誰もいなかったんだ、音楽室……」

その生徒とは、その時はそれで会話が途切れてしまったのだが、最後に私はエールを送った。

さわ子「頑張ってね。軽音楽部。」

とはいえ、私自身もやれることはあるだろう。その時、音楽のプリントを取りに来た生徒に「けいおんがくって何ですか？」と尋ねられたので、私は友人から初めて聞いた時の、あの言葉をまねして生徒に伝えてみた。

さわ子「軽い音楽と書いて、軽音よ」

唯「軽い音楽……？」

さわ子「そう、軽い音楽。」

翌日から、私は生徒との会話の中で、それとなく軽音の話題を振ってみることにした。例えば、授業中や吹奏楽部の練習中など。それなりにみんな興味は持ってくれたようだが、軽音楽部が廃部危機を免れた、という話は聞かなかった。

そして、あと1週間で廃部になる、という時だった。

堀込「山中。」

さわ子「あ、先生。」

堀込「おいおい。お前も先生だろう。」

堀込先生……古文の担当で、高校3年生の時の学年主任だった。あの頃は、随分目をつけられたものだ。そのせいか、私にとって堀込先生は今でも「先生」だった。

さわ子「1年経ちましたけど……やっぱり私にとって堀込先生は

「先生」なんで。そもそも、先生も私のことを未だに呼び捨てじゃないですか。」

堀込「うん、まあ……それも、そうだな。」

さわ子「ところで、今日は何か？」

堀込「ああ、これ。うちのクラスの生徒で平沢唯っていうんだが、今まで部活を決めてなかったんだが、今日、軽音楽部に入りたいって入部希望を出してきた。はい。」

さわ子「あ、ありがとうございます。」

堀込「これで部員数が4人になって、廃部は無くなったな。良かったな。山中。」

そうか、これで廃部を免れることになったのか。私は、喜びを隠しきれなかった。

さわ子「あ、でも、なぜこれを私に？」

堀込「お前の後輩だろう。渡してきてやれよ。」

私は、喜び勇んで、音楽準備室へと向かった。そういえば、音楽準備室に行くのも久々だった。音楽教師になったとは言え、ほとんどの器材は音楽室に置かれていたので、準備室に行くのは、まさに高3以来だった。

さわ子「みんなー！！入部希望者がいたわよ。」

久々に入った音楽準備室はあの頃とほとんど変わりがなかった。変わったのは、そこにいたのが友人ではなくて生徒になっていたという部分だけ。彼女たちはお茶をしていた。そういえば、私も放課後は毎日、時には授業もサボって、ここでのダベりに明け暮れたものだった。

さわ子（変わってないな……何もかも。）

私は入部希望書を、田井中さんに渡すと踵を返した。

——ここからの軽音楽部は、あなた達が作っていくのよ。私は……たまにこっそり聴かせてもらっわね。

降りていくと、平沢さんに出会った。少し彼女は緊張しているよ

うだったの、落ち着かせるように、軽音楽部のある場所を教えた。その日の夕方、いつものように吹奏楽部の指導をしている時に、力強いドラムの音と、安定感のあるベースの音と、調べを歌うキーボードの音が聞こえたような気がした。

その年の秋を迎えた。

律「山中さわ子、わが校の音楽教師である……」

さわ子「ごめんなさい。私、吹奏楽部の顧問もしているから……」

律「今まで声をかけてきた男の数は数知れず……」

さわ子「おだてても無理です！」

軽音部の生徒たちが、声をかけてきた。何事かと思いきや、私に軽音部の顧問を頼みたいということだった。なんと今まで顧問のいないまま活動してきたのだという。あきれもしたが、私自身、軽音部の顧問の先生が誰だったかなど、覚えていなかった。高校時代も顧問の先生に会ったことなど、なかったような気がする。

軽音部出身の私が軽音部の顧問を引き受けるようになれるとは、時の流れの妙を感じた。もちろん、彼女たちの危機であるから、出来る方法で手助けしたいと思ったし、そのもつとも正当な解決方法は、私が顧問として就任することであろう。しかし、一方で恐れ多くもあった。私がそもそも顧問など関係なく破天荒に活動してきたものだから、そんな私が引き受けていいのかどうかと思った。それに、私自身、軽音部のOGとして、現軽音部の一ファンとなって静かに見守っていたいと思っていた。

そこで、吹奏楽部の指導を理由に、軽音部を率いることは固辞しようと思っていた。

唯「先生ってこの卒業生だったんですか？」

さわ子「そうだけど、どうして？」

唯「さつき、軽音部で見つけたアルバムに先生に似ている人がいたから……」

さわ子「えっ!？」

驚いた。まさか、あの時の写真が残っていたとは。私は居ても立ってもいられず、ダッシュで音楽準備室へと向かった。そして、確かにそのアルバムはあった。が、私の写真だけが外されていた。律「念のために、先に外しておいたんですよ」

さわ子「そうよ……私高校生の時、この学校の軽音部にいたの……」知られてしまった以上、仕方がない。私は自身の高校時代のことについて語ってみせた。OGであること、メタルにはまっていたこと、彼に振られたことまで。この話をどう受け止めてくれるかはわからなかったが、ありのままに話をした。

律「バラされなくなったら、顧問やってください」

彼女たちは強く逞しかった。そこまで乞われているのであれば、私も覚悟を決めよう。私は軽音部の顧問になることを決めた。

唯「ちよつと弾いてみて」

レスポールを渡された。フライングVを持って音楽準備室で暴れまわった、あの頃の記憶が鮮明に蘇る。私は、高校生に戻ったつもりで、あの頃を思い出しながら、思いっきりレスポールを掻き鳴らした。

音楽準備室で久々に掻き鳴らしたエレキは、かつてのスピリットを思い出させる。私はその気持ちのまま、普段生徒に対して抱いていた感情をぶちまけた。反社会的行為の象徴としてロックやメタルが編み出されてきた。教師にとっての反社会的行為といえば、生徒批判だろう。私は、むしろそうするのが礼儀であるかのように、速弾き、タッピング、歯ギターと鳴らしてみせた。

「お前ら、音楽室好きに使いすぎなんだよー!!」

さすがに彼女たちは引いていた。ロックとポップスの中間を目指していた彼女たちにとって、私は異型の存在に見えたらう。しかし、覚悟を決めて私もメタラーとしての本性を見せて、彼女たちの信頼はむしろ得られたのであった。そして、私自身も、すべてを受け入

れてくれた彼女たちを信頼でき、顧問を引き受けることに不安はなくなつた。軽音部に受け入れられたのは2度目である。軽音部は、何も変わらないままに、私という存在を受け入れてくれた。

その後、私は軽音部の顧問として、彼女たちの企画するイベントに積極的にのつていった。クリスマス会や合宿など、高校時代にはできなかったことだ。軽音部の面々は、かつての私のようなスピリットは持っていなかったが、かつての私のスピリットを受け入れることに抵抗はなかった。私は普段、以前通りに優しくお淑やかな姿である一方、軽音部の前では、まるで高校時代に戻つたような、破天荒なもうひとつの私であることができた。

さわ子「心のオアシスなの」
律「みんなに見せてやりたいぜ……」

高校時代からの趣味である、ステージ衣裳の製作も再開した。唯ちゃん、紬ちゃんは進んで楽しそうに着てくれるし、澪ちゃんに着させるのも、それはそれで楽しかった。そんな私をも、なんだかんだで彼女たちは楽しそうに受け入れてくれた。

彼女たちは2年生になり、新入部員として中野梓ちゃんが加入した。猫耳が似合いそうだったので、さつそく私は猫耳を付けさせた。その姿は猫そのもので、特に唯ちゃんに気に入られたようだった。あだ名が「あずにゃん」になったのも、むべなるかな。

そんな梓ちゃんは、軽音楽に対しても熱心だった。しかし、私もともと「軽い音楽」のつもりで軽音を始めた人間だから、軽音楽を一生懸命練習するという考え方に、どうも違和感があった。だから、軽音に対して必死になっている梓ちゃんを見て、つい言ってしまったのだ。

さわ子「うるさいー!!」
梓「ええーっ!?!」

律「さわちゃんのアホーっ!!」

しかし、一生懸命にやろうとしている人に向かって、やめろとは言えない。私は苦し紛れに「静かにお茶がしたかったから」と答えた。しかし、これが火に油を注ぐような受け応えになってしまったらしく、

梓「こんなじゃダメですーっ!!」

と、梓ちゃんをキレさせてしまった。

私は、とにかくティーセットの撤去だけはかんべんして欲しいと彼女に言った。うまい言い訳としては、軽音に対して必死になっている梓ちゃんを宥め、ゆとりのある楽しい軽音部であった方が、いい活動ができるということを説明しようとしたんだと。しかし、別の角度から見れば、それは私の軽音に対する印象でしかなく、私が母校の軽音楽部を、私がいた時のようにしていただけだったのかもしれない。いや、むしろ、本心はそこにあつたろう。私はその時、突然の出来事に冷静な判断が下せずいた。

その場合は、唯ちゃんが梓ちゃんに抱きついて治め、後日澪ちゃんが、ゆとりを持って活動することも大切、ということを梓ちゃんに説いてくれた。彼女も、何でもかんでも否定するのはよくないと悟り、そのおかげで、軽音部は元通りになったが、私としては内心忸怩たる思いが残った。

とはいえ、その後は梓ちゃんも場の空気に慣れ、楽しい軽音部としての活動を続けていた。

2年目の文化祭の前には、なぜか今まで決まっていなかったバンド名を決めることになった。あまりに統一されない意見を聞いて、私は「名前なんでもでもいい」とばかりに、勢いで「放課後ティータイム」というバンド名をつけた。とはいえ、実際に放課後にティータイムをしていたし、放課後という部分に学生らしさと、ティータイムの部分に緩やかさを付け加えた、なかなかいい命名だった

のではないかと思っている。

その後、律ちゃんが風邪でダウンしたり、唯ちゃんも風邪でダウンして、本番に急遽私が出るハメにもなったが、それはそれで楽しいイレギュラーだった。生徒のピンチを何らかの形で埋めることができ、それなりに良かったと思っている。その分、みんなはいつも以上にいい演奏したし、昨年以上の晴れやかな笑顔を見ることができた。……そして、私自身も久々にギターを弾いて歓声を受けたのは、満更でもなかったし、何よりも楽しかった。もちろん、5人で弾いている時の演奏が何よりも良いし、それを聞くのが楽しみであるが、私もサポートメンバーとして加われたことには、それはそれで楽しませてもらった。

そして、2学期の期末試験の季節になった。顧問になって一年以上も経つと、放課後のティータイムがもはや日課となる。そのため、定期試験の一週間前は部活動禁止となっているこの高校では、この時期は何よりも辛い時期だった。

そんな幾分重い面持ちで歩いていると、律ちゃんに声をかけられた。前にも案じた通り、私は普段、以前通りに優しくお淑やかな姿である一方、軽音部の前では、高校時代の姿そのままに接していた。だから、その日もその面持ちのまま振り向いた。

律「さわちゃんからも何か言ってやって……うわっ!!」

どよーんとした面持ちのまま振り返ると、私と同じような顔をした唯ちゃんがいた。これなら、賛同が得られるかもしれない。私は素のままに言った。

律「どうしたんだよ さわちゃん」

さわ子「お茶とお菓子が足りないのよ」 なんて最近お茶会してないのよ!」

そうは言ったが、その理由はさすがに私でもわかる。問題は、そこからどうするかだ。

律「え?だってテスト前だし……」

さわ子「それがどうしたの？」

律「ほえ？ いやだから、テスト前だから部活動禁止…」

私はぐつと力を込めて、律ちゃんに言った。

さわ子「そんな規則と私、どっちが大事なの？」

律「そ…そりゃ規則だろ」

私はそれを聞いて、律ちゃんらしくないと一蹴し、唯ちゃんをこちら側に引き込み、ムギちゃんにお菓子を持ってきていることを確認し、ついでにその場を通りがかった漑ちゃんを拉致り、音楽準備室へと向かった。

高校時代はテスト前に部活動が禁止されるなどという規則は聞いたことがなかった。いや、正確に言えば禁止されていることは知っていたが、守ってはいなかった。むしろ、そんなときだからこそ、より練習に精を出した。今と昔では立場もやっていることも違っているわけだが、それでも軽音部として何らかの場を置く、という面では同じだった。前にも言ったが、軽音部は何も変わらないままに私を受け入れてくれる。そんな思いをケーキと一緒に噛み締めていた。

漑「なんて幸せそうな顔…」

紬「あの…本当に勝手に部室使って大丈夫なんですか？」

さわ子「大丈夫大丈夫 バレなきゃいいのよ」

——そういえば、高校時代も後輩にそう言われた記憶がある。彼女は少々臆病で、ライブ中はともかく、普段は大人しめの、私が比べものにならないほどの貞淑な女性だった。そして、その時も私は「大丈夫」と答えたのだった。しかし、実際は大丈夫じゃなかった。確か……

と考えていると、準備室のドアが開いた。

堀込「コラーツ！ お前ら何やってる！！」

私は後ろを振り向いて、とっさにこう答えた。

さわ子「テスト前なのに部室使っているのを注意しました」
律「おいっ!!」

——デジャヴにも程がある。

もつとも、当時は高校3年生。今は教師になって3年目。確実に立場は変わっていた。だからといって、相手の評価も変わっているとは限らない。

堀込「フオーク持って、そんなこと言っても説得力ないぞ」

さわ子「あ…」

堀込「お前らもこいつが顧問で大変だろうが、ちゃんと面倒見てやってくれ」

律「は…はあ…」

堀込「早めに帰れよ」

——そう、あの時も、私は後輩にそう告げる先生の姿を見た。変わったのは先輩が顧問になったということだけ。軽音部にいる私は昔のままであると、先生にはすっかりバレていた。

しかし、規則を破ってまでもお茶会を設けた甲斐があった……かどうかはわからないが、その期末試験では唯ちゃんの成績が異常に良かった。唯ちゃんは「ムギちゃんのケーキのおかげだよ」とも言っていたし「さわちゃん先生がみんなでお茶を飲もうって言うてくれたから気合が入ったよ」とも言ってくれた。結果的には、生徒の良い結果につながったのだから、私も教師冥利につきる。

年末は彼女らと過ごし、年明けを迎えた。

そして、3学期が始まってすぐに、私は来年度の担任の内示を受け取った。

さすがにこのことばかりは、いくら軽音部のメンバーであっても漏らすわけにはいかない。HTTの方も、澪ちゃんのストーカー騒動など慌ただしい事件も起こり、幸いにして——出来事そのものは、

全く幸いではないが——私が勘ぐられることはなかった。それは良かったのだが、逆に発散出来る場所に困り、私は大いに内に抱えることになってしまった。

そんな時に、私は堀込先生と話す機会を得ることとなった。

堀込「山中。」

さわ子「…先生。」

堀込「相変わらずだな。その呼び方は……さて。ここでは何だから、ちよつと付き合ってくれるか。」

私は堀込先生に連れられて、面談コーナーへと入った。普段は生徒と先生の面談に用いられることが多く、先生同士の談話室として使われることもなくはなかったが、珍しかった。もちろん、私はそういった用途にここを使ったことはない。時間は遅く、誰もいなかった。

堀込「こんな風に話をするのは、高3以来だな」

さわ子「そうですね。あの頃と全く変わってないみたいですが。」

変わったことといえば、二人の社会的なステータスか。いや、絶対的ステータスならともかく、相対的なステータスは変わっていないように思う。

堀込「単刀直入に言おう。今回の担任を教頭に進言したのは俺だよ。改めて言う。山中……いや、山中先生、あなたに來年度の高校3年生を担任をお願いしたい。」

さわ子「……校長にもお話ししました通り、今まだ決めかねている状態です。……しかし、先生。なぜこれほど私を推挙しようとするのか、聞かせてもらえませんか。」

堀込「……うむ。一言でいうと、生徒の心からの信頼を得ている、というところだな。先日、お前が音楽準備室で軽音楽部の生徒とお茶を飲んでいたことがあつたろう。」

さわ子「え…ええ。」

上手く取り繕おうとして失敗した、最近の苦い経験だ。そのことを口にされて、少し気まずい。

堀込「あの時、生徒はみんな、お前を信頼している顔をしていた。準備室のドアを開けたときの4人の顔を見れば、お前がいかに生徒たちに愛されているかがわかったよ。だからこそ、お前も自信を持って『注意してました』と言えたんじゃないか？ 間髪入れずに田井中がツッコミを入れてくることまで計算してな。もし、信頼がお互いに無ければ、そんな生徒を売るような発言は、いくら俺の前でもできないだろうよ。……7年前、お前が後輩を護ろうとして、あえて『注意してました』と言ったのと同じ手だろ。あの時は『ギタ―を持ったままで『注意してました』ってどういっつもりだよ』と思ったが、今回もフォークを持ったままシレッと言うからなあ。それで、俺の叱責の矛先を自然と自分に向かうように仕向けたと、こういうことだろう。」

古典の先生らしく、少し脚色された部分もあったが、概ね私の意図した展開を当てていた。もつとも、この作戦は前々から考えていたわけではなく、たまたまその場で思いついたのにすぎないのだが。堀込「その後、俺は田井中に『お前らもこいつが顧問で大変だろうが、ちゃんと面倒見てやってくれ』といったわけだ。その時の田井中は確かに驚いたような顔をしていたんだが、お前が顧問であることをしつかり受け入れている様子だったな。生徒に真正面から受け入れられるってことは、なかなかないんだぞ。」

そうか、軽音部は私を受け入れてくれる、と前に感じたこともあったが、それはすなわち、今の軽音部に受け入れられているということでもある。そして、今の軽音部とは、間違いなく、HTTの面々ということでもある。

堀込「教師にも2パターンあってな。俺みたいに、生徒をしつかり御することのできる教師と、お前みたいに、生徒の目線から物事を考えられる教師というのがいて、これは両方必要だ。そして、今のお前なら、生徒と同じ目線から生徒と一緒にってクラスを率いていけるはずだ。」

だとしても、5人の部活動の顧問から、35人のクラスの担任に

なるのでは、やはり責任感や仕事の重大さの面から見て、勝手が相当変わるといのは明らかだった。

さわ子「でも、5人の顧問と35人の担任だと、色々変わるような……」

堀込「基本は一緒だ。一人ひとりと向き合うこと、全体の調和とベクトルを見ること。これは5人でも35人でもそんなには変わらん。お前にはまだ経験がないからかもしれないが、それは俺が保証する。……それに、あの子たちも、お前に最後見送られることになれば、それはいい思い出になるんじゃないか」

さわ子「え？」

そう言つと、先生は一枚の紙を出した。

堀込「これは、来年度のクラス分けの試案だ。もつとも、三年生のクラス分けはほとんど俺に任されていて、教頭と校長は判をつくだけだから、このままのクラス分けにできと思う。」

私は、自分の名前がすでに担任の欄に入っている二組の生徒を見ていった。

さわ子「秋山澪、琴吹紬、田井中律、平沢唯、真鍋和……」

堀込「ちよつと露骨かもしれないが……まあ、お前も知っている生徒が多い方が心強いだろう。それに、こいつらはお前が初めて1年生の頃から面倒を見て、一緒に成長してきた生徒だ。最後は担任として送り出してやれ。お前の「生徒」としてな。もちろん責任重大だが、やってやれなきゃ、この先もつとしんどくなるからな。」

そう、いずれ私も担任や教科主任など、より重責のある職につくことになる。そう考えると、これは大きな第一歩であると同時に、多くの人に背中を押されてその一歩を踏み出せるのだ。ここまでお膳立てしてもらえて、私はかなりの果報者かもしれない。

堀込「こいつらにとっては、間違いなく、お前が一番の「先生」なんだよ。そんなお前が最後は一番近い存在として見送ることが、何よりもいい。ま、俺も学年主任になるしな。別にすべてをお前に投げようっていうことじゃない。……それでどうだ。」

軽音部の顧問になると決めた時と同じだ。こうなれば、私もやってみようじゃないか。ここで保留しては、私はそのままになってしまふ。それに、私自身も不安よりも期待が胸に膨らんできた。最後の一年間は、私がもつとも近い存在として、彼女たちと関われる。今までの教師生活の中で、最高の一年が送れそう、そんな確信に満ちあふれていた。

その後は、来年度の担任の準備で忙殺されたり、準備室で埋れていた私のギターが50万になり、ちよつと羽振りが良くなったりもしたもののだが、あつという間の出来事だった。そして、4月を迎えた。

始業式の日、私はいつもより早めに出校し、1年目の時のように掃除とお茶汲みをした。10年程前に初めてこの学校に入学し、4年前に初めてこの学校で教えた。そして、今日、初めてクラスの担任となる。

——この一年は、今までの集大成になるだろう。色々、楽しいこと厳しいことあるだろうが、すべてを緩やかに包み込むように……！
3年2組。これが私の一年間。その一年間がいよいよ始まる。

私は、真新しい出席簿を持って3年2組のドアを開ける。さすがに、黒板消しをドアに挟むような奴はいないよな。

「みんなー、席について下さーい。」
教壇に立って、始める。

「今年からこのクラスを受け持つことになりました、山中さわ子です。」

F i n .

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3012q/>

さわ子「たんにん!」

2011年1月21日15時20分発行